

運動疫学 ニュースレター



令和6年12月2日発行 No.22

第26回 日本運動疫学会学術総会のご報告

第26回学術総会大会長／（公財）身体教育医学研究所 岡田 真平



現場連携セッション



閉会後の集合写真



2024年6月29日（土）・30日（日）、佐久大学にて「社会が求める運動疫学～身体活動支援・運動指導現場の拠り所となる学会として～」をテーマに開催しました（7月1日は東御市湯の丸高原ツアー）。朴相俊実行委員長（佐久大学）を中心とした13名の実行委員の先生方と、学会事務局及び渉外、学術、広報の各委員会の先生方に、企画検討から当日運営まで大変お力添えをいただきました。また、6つの公益的団体の後援、8つの団体・企業の協賛・協力、そして当研究所員や佐久大学学生の運営協力等により、無事に大会を終えることができました。

プログラムは、企画担当の実行委員および登壇の座長・演者の先生方のご尽力で、非常に有意義なものになりました。企画名のみで恐縮ですが、御礼の意を込めてご紹介します。【1】現場連携セッション：実社会・現場に受け入れられる研究の進め方とは？～リアルワールドセッション～、【2】データ活用セミナー：身体活動・運動に関する公的統計の二次利用、【3】教育講演Ⅰ：健康日本21（第三次）をはじめとする健康政策と日本運動疫学会・健康運動指導士等への期待、【4】JAE-E-ASPA共同国際シンポジウム：Physical Activity and Built Environments - How to Translate Research Findings into Policy and Practice、【5】特別講演 Historical Lecture：Some Personal History and Future Perspective on Physical Activity and Sedentary Behaviour Research、【6】教育講演Ⅱ：ウェアラブルデバイスを用い

た睡眠研究の最前線：「子ども睡眠健診」の実現に向けて、【7】疫学教育講演：運動疫学の軌跡と未来—Steven N. Blair 先生、Harold W. Kohl III 先生と私たち、【8】疫学教育グループトーク Talk with Experts：日頃の疑問から研究の最先端まで、【9】フィールドセッション：高地トレーニング拠点と自然体験活動拠点の利活用。また一般演題として、10の口頭発表と44のポスター発表がありました。この中から、厳正な審査を経て、最優秀演題賞1、優秀演題賞2、ポスター賞1の計4演題を表彰しました。その他、運営面の工夫として、①現場実践者など非会員の参加促進、②ファミリーウェルカム企画、③地元食材の昼食、④LINEオープンチャットの活用、等も試みました。（詳細報告は<https://sites.google.com/pedam.org/jaee26th>）

本学術総会の現地参加者の総数は199名で、国際セッションのオンライン参加者は9か国26名でした。本学術総会を盛り上げてくださった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

また次回、2025年7月に大阪府摂津市で開催される学術集会にも多くの皆様のご参加をお願いいたします。



湯の丸高原ツアー

CONTENTS

1. 第26回 日本運動疫学会学術総会のご報告 … 1
2. 第27回 日本運動疫学会学術総会のご案内 … 2
3. 第9回 運動と健康：分野横断型勉強会のご報告 … 2
4. 第78回 日本体力医学会大会シンポジウムのご報告 … 2
5. 第23回 運動疫学セミナーのご報告 … 3
6. 運動疫学セミナーに参加して … 3
7. 私と運動疫学 … 4
8. 広報委員会より SNS の紹介と活用促進 … 4

第 27 回 日本運動疫学会学術総会のご案内

第 27 回学術総会大会長／（国研）医薬基盤・健康・栄養研究所 小野 玲

この度、第 27 回日本運動疫学会学術総会を医薬基盤・健康・栄養研究所が中心となり 2025 年 7 月 4 日（金）・5 日（土）に大阪府摂津市の摂津コミュニティプラザにて開催します。今大会は「千言万歩～エビデンスに基づく実践の道標～」と題して、エビデンスを社会で実践することで、国民の身体活動、運動習慣の向上の一助になる大会にしたいと思っています。

関西では内藤義彦先生（武庫川女子大学）、



野村卓生先生（関西医科大学）の下、3 回開催され、今回で 4 回目の開催になります。関西でも日本運動疫学会会員も増え、今回は関西を中心とした多くの会員と一緒に開催させていただきます。学術発表やシンポジウムだけでなく、コロナ前には恒例であった交流会である「ナイトセミナー」も開催予定です。ぜひ、多くの会員、興味のある方に参加いただけますよう、スタッフ一同準備しておりますので、ご参加いただきますようお願いいたします。

第 9 回 運動と健康：分野横断型勉強会のご報告

学術委員長／九州大学 本田 貴紀

2024 年 9 月 1 日に「第 9 回運動と健康：分野横断型勉強会」が開催されました。今回は、デバイスを用いた測定・評価のめざましい発展を踏まえ、「スマートフォン・タブレットを活用した疫学調査 ～デバイスによるアセスメントや遠隔調査の可能性～」をテーマとしました。講師として、天笠志保先生（帝京大学）、河合恒先生（東京都健康長寿医療センター研究所）、岸本裕歩先生（九州大学）をお迎えし、それぞれのご専門から疫学研究におけるデバイス活用の現状と課題についてご講演いただきました。

天笠先生からは、iPhone (iOS) のヘルスケアアプリから歩数計測データを収集するための改訂版 OCR ツールに関して、その精度やエラーの傾向について詳しく説明をいただきました。河合先生からは、スマートフォンやタブレットを用いた日常歩行速度や立ち上がり動作の測定、さらには認知機能の測定まで幅広い研究成果を発表いただき、デジタルコホート構想に至る取組について情報提供いただき



ました。岸本先生は、COVID-19 のパンデミック以前から継続している遠隔運動教室の取り組みについて、最新の動作分析技術を交えながら、現実的な課題と環境整備の重要性について講演いただきました。当日は会場およびオンラインを合わせ、約 50 名が参加し、活発な討論が行われました。懇親会も盛況で、交流の機会になりました。

台風 10 号による交通の混乱はありましたが、ハイブリッド形式により柔軟な対応が可能となりました。本勉強会は例年、日本体力医学会の関連研究会として開催されており、学会会員のみならず、幅広い分野の方々にとって、貴重な交流と学びの場となっています。次回もぜひ、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

最後に、本勉強会の開催にあたり、多大なご尽力を賜りました学術委員の香村恵介先生、江尻愛美先生、桑原恵介先生、日本運動疫学会事務局の皆様、深く感謝申し上げます。

第 78 回 日本体力医学会大会シンポジウムのご報告

学術委員／東京都立大学 田島 敬之

学術委員会では、運動疫学の知見を体力医学会の会員に発信し、相互の連携と発展を図ることを目的とした企画を進めています。その一環として、2024 年 9 月 2 日から 4 日に佐賀大学本庄キャンパスで開催された第 78 回日本体力医学会大会において、シンポジウム「十人十色の身体活動：リハビリテーション領域における身体活動評価の課題と介入の考え方」を開催しました（9 月 2 日 16:40 ～ 17:40、C 会場）。

本シンポジウムでは、リハビリテーション領域における身体活動の重要な課題について、各専門家から貴重な知見を共有していただきました。まず、私からリハビリテーション領域における身体活動評価・介入の重要性と課題について、基本的な内容に触れながら問題提起を行いました。次に、埼玉医科大学の清水夏生先生には、脳血管疾患患者における身体活動量の増加と、そのための評価方法や行動変容の必要性について講演していただきました。東京大学の小野

敬済先生からは、要支援・要介護高齢者の外出行動の心理・社会的な「質」に焦点を当てた外出習慣の研究についてお話いただきました。最後に、日本医科大学の陣内裕成先生からは、運動器疾患、とくに変形性膝関節症に対する身体活動介入の現状と、個別化されたアプローチの重要性についてご講演いただきました。



今回の大会では、非常に多くのシンポジウムが企画されており、中でもリハビリテーションに特化した本シンポジウムでしたが、それでも延べ 100 名近く参加をされていたようで、多くの先生方に関心をいただけたのではないかと思います。

学術委員会では、今後も様々な企画提案を行う予定です。引き続き、多くの先生方にご参加いただけたら幸いです。

第23回 運動疫学セミナーのご報告

セミナー世話人／愛媛大学 山本 直史

第23回運動疫学セミナーが2024年9月13日（金）～9月15日（日）の日程で、愛媛県伊予市のウェルピア伊予にて開催されました。開催当日は、参加者の多くの方が搭乗される羽田－松山便の出発時刻が大幅に遅延し、送迎バスの再調整に追われるといった“島”ならではのトラブルもありましたが、セミナー初の四国開催を参加者・講師の先生方と一緒に全員で迎えることができた際には心より嬉しく思いました。

今回の運動疫学セミナーでは、研究デザインを意識した研究計画の立案を目指すベーシックコースと、より実践的に社会問題の解決を図る課題を設定し、研究助成の獲得や国際誌でのアクセプトが期待できそうな研究計画の立案を目指すアドバンスコースを設けました。ベーシックコースには12名、アドバンスコースには9名と例年よりもやや少ない参加人数とはなりましたが、その分、講師（10名）と参加者同士との濃密なコミュニケーションが図られ



たことと思います。

昨年度と同様、事前学習として講義のオンライン動画の視聴を設定し、現地ではグループワークの時間に多くを割きました。また、初日、2日目にも研究計画の進捗状況を発表してもらい、ディスカッションの時間を十分に設けました。その甲斐もあり、最終日の報告会では全グループとても素晴らしい研究計画を発表いただきました。立案された研究計画書は報告書にまとめられ、日本運動疫学会のウェブサイトに掲載されていますので是非ご覧ください。

次回のセミナーは、2025年9月5日～7日に帝京大学箱根セミナーハウスで開催予定です。皆様のご参加を

心よりお待ちしております。最後に、セミナー開催に当たり多大なるご尽力をいただいた門間委員長をはじめとするセミナー委員の先生方、学会事務局、および、セミナーを盛り上げていただいた参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

運動疫学セミナーに参加して

慶應義塾大学大学院 中村 学

私は博士課程への進学を決めた2021年から運動疫学会に入会しました。当時はコロナ禍のため対面の学会は軒並み中止で、対面形式の学会はほとんどありませんでした。2022年に神奈川県東海大学で開催された第24回日本運動疫学会学術総会が自身として初めての運動疫学会への参加となり、そこから学術総会には毎年参加し発表してきました。

そしてこの運動疫学セミナーは今回が初参加で、ピッカピカの一年生のつもりで申し込みをしました。セミナー委員の先生に相談をし、きっとアドバンスコースがいいでしょう、というお導き（？）をいただき、3日間の運動疫学セミナーに参加したのです。

私がこの運動疫学セミナーをオススメできる点は3つあります。まず、講義動画の事前学習ができることです。セミナー当日、ベーシックコースでは講義もたくさんあり、アドバンスコースはグループワークにかなり時間を割きますが、事前学習によりどちらのコースでも運動疫学に必要な知識を体系的に学習できます。

次に講師の先生方と昼夜問わず、質問したり意見交換ができることです。これが運動疫学セミナーの醍醐味だと思います。研究のノウハウや研究室の活動について具体的に伺うことができ、学術総会以上に濃い時間を過ごすことができました。最後の夜も遅くまで発表前のご指導をいただきました。



最後にグループワークです。色んな研究室の先生方と一緒に研究計画を立案し、最終日に発表しました。アドバンスコースでは3名ずつの3グループに分かれ、一年生の私は最初不安もありましたが、同じグループの先生方が頼もしく、様々な意見をもとに一つの研究計画を立案することができました。

こんなピッカピカの一年生が、濃い3日間を過ごし、ひと回り大きくなったのも本セミナーを企画・運営してくださった先生方、グループワークのメンバー、参加者のおかげです。本当にありがとうございました！

私と運動疫学

(国研) 医薬基盤・健康・栄養研究所 小野 玲

私と身体活動・運動の出会いは、理学療法士として、運動を機能低下した患者の治療手段として利用していたことに始まる。臨床を経験したのち、縁あって大学に異動した。そこで、血液腫瘍患者が骨髄移植時に2-3カ月クリーンルームという狭い無菌室で隔離され、集中的な治療を受けた後にクリーンルームを出る際には体重が減少し、筋力が衰えている。その結果、治療は成功したとしても、自宅で日常生活を送れない症例に出会った。治療を優先するあまり、廃用症候群を起こしていたのである。そこで、井上順一郎先生（神戸大学医学部付属病院）とともに、クリーンルーム内での身体活動の維持と運動療法を提案した。当科の先生方の理解もあり、移植早期から展開することで、多くの症例において骨髄移植治療終了時に自宅で日常生活が送れる身体機能を維持できるようになった。病院での早期からの身体活動の維持等が患者の生活に福音をもたらしたわけである（もちろん、多くの臨床家の研究成果があつてのことではある）。

その頃、自分達の行った研究の質が必ずしも十分でなく、質の高い研究って何だろう？研究デザインって何だろう？と考えているときに、疫学に出会った。John Snow のコレラ対策、高木兼寛の脚気の話聞き「因果

はわからなくても、アウトカムは変えられる（人をハッピーにできる）」と思った。自分の中で身体活動・運動と疫学がマッチした瞬間である。とは言え、ここまでこの分野で頑張ってきたのは、運動疫学会を通じて出会った諸先生方、何よりも内藤義彦先生（武庫川女子大学）の支え（飲み会）があつたことは言うまでもない。



身体活動・運動は健康を通じて、多くの人をハッピーにできるポテンシャルを持っている。運動疫学的には、健康維持のための身体活動や運動習慣の基準値は明らかになりつつある。しかし、健康日本21（第二次）の最終評価において、歩数や運動習慣は目標値を下回り、緩やかに減少傾向であった。

なぜであろうか？運動疫学に求められていることがエビデンスを作るだけでなく、その先が求められているのではないだろうか。運動疫学を歩んできた研究者として、エビデンスの集積はもちろんのこと、人をハッピーにするためにどうすればよいかを、運動疫学会の会員と一緒に考えていきたい。

広報委員会より SNS の紹介と活用促進

広報委員会委員長／大阪大学 難波 秀行

広報委員会では、X（旧 Twitter）、Instagram、Facebook など SNS による情報発信を行っています。HP 下部の SNS リンク先よりアクセスが可能となっております。レスポンスデザインを採用しておりますので、スマホでもアクセスしやすくなっております。また、会員向けの動画配信を行っており、HP より学術総会およ

びセミナーの一部を視聴することができますのでご活用ください。パスワードは、事務局よりメーリングリストにてお知らせしております。このニュースレターについても、HP より PDF にアクセスができますので、どうぞご利用ください。

日本運動疫学会の最新情報は公式ホームページを確認してください。公式 HP : <http://jaee.jp>

・会員の投稿論文を募集しています。

・会員の運動疫学研究を支援しています（セミナー、勉強会、プロジェクト研究）。

・新規会員を随時募集しています。



発行：日本運動疫学会

編集：日本運動疫学会 広報委員会

日本運動疫学会事務局

〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

早稲田大学スポーツ科学学術院内

E-mail : jaee.info@gmail.com